

# Stuart Dybeck

作家 スチュアート・ダイベックに聞く

## 僕は物語を書きながら 物語自身の声に耳を傾ける

ジャパンフアウンデーションでは、文化人招へい事業として、2008年10月20日から11月1日にかけて、米国の作家・詩人であるスチュアート・ダイベック氏を招へいしました。ここでは来日中に東京都内で開かれた同氏のトークショーの様態をダイジェストでお伝えします。

聞き手  
しばたもとゆき  
**柴田元幸**  
翻訳家、東京大学文学部教授



トークショーで自らの作品と文学観を語るダイベック氏

撮影：高木あつ子（以下も同じ）

スチュアート・ダイベック●1942年、シカゴ生まれ。ノースウェスタン大学で文学を教える。柴田元幸氏によって翻訳された『シカゴ育ち』『僕はマゼランと旅した』『それ自身のインクで書かれた街』以外にも、第一詩集Brass Knuckles、第一短編集Childhood and Other Neighborhoodsがある

京浜工業地帯の町工場を歩き  
シカゴの下町を思う

柴田 20年前に初めてダイベックさんの『Bright』（「荒廃地域」、短編集『シカゴ育ち』に収録）という短編を読んだと  
きに、ちょっと傲慢ですが、これは僕が訳すべきだと思いました。そこで描かれていたシカゴの下町が、僕が育った京浜工業地帯の下町にとってもよく似ていたからです。

それから20年後、今日は朝から六郷川ぞいの工場が並んでいる地域を歩いてきました。その作者を僕の知っている工業地帯を案内して歩くことになるとは、思いもよませんでした。まず、その印象からお聞かせいただけますか。  
ダイベック 柴田さんに、「君はほかにいろいろな作家を訳しているのに、なぜ僕の作品を訳すんだ」と聞いたなら、「いや、あなたの作品を読むと懐かしいんです」と言いました。今日、実際に京浜工業

地帯を歩いてみて、懐かしさというのはよくわかりました。川と工場、そして労働階級の人たちがいる。そういう感じが僕が育った町にすごく似ています。午後は驚くべき場所に行きました。町工場ですが、銅、アルミニウム、ブロンズ（青銅）などを溶かす小さな工場です。作家というのは、二つのことをするものだと思います。一つめは、見たものの像を捉えること。今日の町工場です。言えば、壁があつて、その隙間から光

が入ってくる感じや、金属が溶けている様子などです。そこでは何人かが働いていて、柄杓を持ち、そのなかには真つ赤に溶けた金属が入っている。そういうところを見ると、錬金術のことを考えずにはいられません。

芸術あるいは言葉というものと、工業あるいは物をつくることに、どんな関係があるかと言えば、どちらも物を変容させるということだと思う。つまり、言葉はただあるものを写し取るのではなく、何か別のものに変容させる力がある。言葉を扱う作家と金属を溶かしている労働者には、そういうつながりがあります。

二つめは、働いている人々のそれぞれが物語になる。日本の町工場で働いている人たちを見て、自分が育ったシカゴの人たちの物語とつながるものを感じる。よい物語には、何か普遍的なものがないと駄目なのです。

### 川端康成の散文にある詩情を 自分の文章に取り込みたい

**柴田** 今までダイベックさんは日本文学に親しんでこられました。日本文学からどんな日本のイメージを得てきたかについて、お話しいただきましょうか。

**ダイベック** 今回の来日のハイライトの1つは、村上春樹さんが会ってくれたことです。すごく影響を受けましたし、この10年ほど大学の授業で、村上さんの作品を繰り返し取り上げてきました。昨日は、その素晴らしい日本の作家と机をはさんで、アメリカのジャズについて話し合いました。これ以上、コスモポリタンな体験はないですね。

**柴田** すごく良かったですね、昨日は(笑)。  
**ダイベック** 日本に来たかった大きな理由の一つは、豊かな文学伝統があるからです。作家が人の作品を読むときに二つの読み方があると思います。一つは、「雑食性の(omnivorous)」読み方で、楽しみのためとか、理由は何でもよいのですが、とにかくいろいろなものを読む。要するに普通の読者がやっているような読み方ですね。もう一つは、作家の読み方がある。書き方を学ぶために人の書いたものを読んで、取り込むという、「肉食性の(carnivorous)」読み方です。

その後の読み方から、日本の作家について話します。つまり、日本の作家から、どういうことを盗めるか、学べるか、どういう点で自分をより良い作家にできるかについてです。

なぜ柴田さんが僕の作品を翻訳してくれるかという点、一つには気質があると思います。彼は僕との気質的なつながりを見出してきていて、僕も彼に気質的なつながりを見出しています。日本文学をたくさん読んできて、例えば谷崎潤一郎も大好きですけれども、神秘的な意味で、気質上のつながりを感じるといふことになると川端康成です。そのつながりで、もう一人書き手を挙げると、批評家でコロンビア大学教授のハルオ・シラネ(白根治夫)になります。彼の『Traces of Dreams』(日本語版は『芭蕉の風景文化の記憶』角川叢書)というモダニズムの観点から俳句を論じた本に影響を受けました。川端にも、そういうモダニズム、特にフランスのモダニズムと、俳文、俳句の伝統を結びつけているところに特色があるのではないかと思えます。

川端の散文には詩情があり、それを今までずっと、自分の文章に取り込みたいと思ってきました。川端の小説の中の詩情がどこから来ているかといえば、それは日本の豊かな古典からの文学伝統でしょう。もちろん、どの世代も伝統に戻って、その伝統を新しいものにつくり変えないといけません。

もう一つ、技巧にまったく関係ないことを挙げておきますと、世界にはいろんな作家がいますが、川端だけが唯一、読んでいるときはうっとりして夢中になるのに、読み終わると依然として、この人はわからないという気持ちが残る、そういう作家だからです。

柴田 しかし、川端的なものと今日見た京浜工業地帯は、どう折り合いがつかの

だろう(笑)。

ダイベック 直接には、つながっていないと思います。今書いている本は、川端の『掌の小説』に大きく影響を受けています。今まで得ていた日本のイメージはそのページからでしたが、今日、工業地帯を歩いてみて、そこから離れることができた。今までの私の作品ではシカゴの川や工場がものすごく大事ですが、それにまた、新しい別の層が加まりました。

読者が小説を読むとき、何を重視するかというと、多くの場合、プロット、ストーリーですね。音楽を聴くときにメロディーを重視するのと同じです。しかし、音楽もメロディーだけででき

ているのではなく、例えばリズムも重要ですね。それと同じように、ストーリーだけではなくて、イメージがどのように積み重ねられるかということも、ストーリーに響きを持たせる、レゾネイトさせる、余韻を与えるという意味では重要だと思います。

今までの話をまとめるなら、どうして作家はわざわざ他国を訪れるのかという問題です。

自分の部屋で、芭蕉や川端、ハルオ・シラネの本を読んでいればよいという考えもあるでしょう。しかし、なぜ他国を訪れるかというと、まず予習として、いろんなものを読んで、知識を仕入れることがあります。一つめは、実際に行つて、今まで見ていなかったものを見て、新しいイメージを得る。それによって、三つめとして、今までの見方ががらりと変わる。それはどんな味になるかわからないカクテルをつくるようなもので、自分でコントロールできるものではないし、コントロールしたくもないものなのです。

つくり手が許容した偶然的要素が新しい何かを生み出す

柴田 新しいものを見たら、その新しさが

「素晴らしい人だね」と  
スチュアートは  
いつも言っていた

柴田元幸

本に滞在した1週間ちよつとのあいだ、スチュアート・ダイベック氏がいろんな人と出会うのを僕は目にした。ジャパンファウンデーションのスタッフ、ガイドや通訳の皆さんからはじまって、作家、書店員、お蕎麦屋さん、町工場で働く人たち……、そうした人たちと時には二三言、時にはじっくり話したあと、彼はいつも「素晴らしい人だね」「魅力的な人だ」と僕に言うのだった。

もちろん僕から見ても、それらの人々はみな、本当に素晴らしい、魅力的な人たちだった。でもそのことを、スチュアートのように、つねに新鮮な驚きと喜びとして自分が受け止められるかというと、自信はない。スチュアートがにこにこ驚いているのを見るたびに、ある人間がいい人になるのも悪い人になるのもある程度は関係の産物だという一般論と、彼独自の、人を好きになる才能のようなもの、その両方をあらためて感じさせられた。

わかるだけの知識は仕入れておくけれども、何が見えても受け入れられるよう自分を十分開いておくということですね。

**ダイベック** もう一つ。もう少し今の考え方ははっきりさせるために付け加えます。ちょっと話が逸れますが、ちゃんと戻ってきますから(笑)。

私の仕事部屋の壁に掛けてある物は一つだけ。それは日本の手づくりの和紙です。真っ白で何も書いてない。作家にとっては象徴的な話で、壁に何も書いてない紙がある。でも、そのために掛けてあるわけではなく、きれいだからです。

もう一つの理由は、その紙に含まれている偶然的要素。紙のテクスチャー、感触が一緒ではない。つくり手が許容したというか、取り込んだ偶然的要素が大事だからです。

一方に川端の芸術があって、一方にその京浜工業地帯がある。それを組み合わせることによって、何が生まれるかはわかりません。しかし、どちらも僕にとっては大事なので、その二つから生まれる偶然みたいなものを信頼したいと思うのです。

短編小説も書き手と言葉の出会い、

経験と言語の出会いから生まれるものです。

今まで読者として、どうして日本の文学に惹かれてきたかを考えると、少なくとも僕にとっては、ある芸術をマスターすることは、コントロールすることではなく、サレンダー、つまり自分を何かに委ねてしまうこと。それがマスターにつながるのです。

そういうことがまさに、さっきお話しした川端を何回読んでもわからないという感じが残ることと関係があるの



スチュアート・ダイベック氏の作品。左より『シカゴ育ち』『それは自身のインクで書かれた街』『僕はマゼランと旅した』いずれも柴田元幸訳、白水社刊

むろん彼のそうした才能は、小説にも確実に活かされている。おそらく本人としてはまったく無自覚でやっていることだと思うが(だからこそリアルなのだ)、スチュアート・ダイベックの作品にあつては、何かが肯定されるために何かが否定される必要はない。旧世界の雰囲気の色濃く漂う移民社会を描くにあつて、旧世界の名残を祝福するために、アメリカン・カルチャーが批判される必要はない。個人の自由が謳い上げられるために、家族の絆が束縛として描かれる必要もない。何かを○として描くために、別の何かを×として描く――僕などはしょっちゅうそれをやっていますので、ダイベックの小説を読むたび、自分の考えの狭さを思い知らされる。

書店のトークでは、シカゴ南部と、京浜工業地帯の類似を強調したので、なんだか自分がダイベックさんと同じくらい偉いみたいな話になってしまったので、無数の違いのひとつについて一言述べた次第。

あ、もちろん、ダイベック氏が、まったく何も否定しないかという点、そんなことはありません(たとえ2008年の時点で米大統領)。

しばた もとゆき ●現代アメリカ文学専攻。東京学芸大学講師、東京大学教養学部助教授などを経て現職。オースター、エリクソン、ミルハウザー、パワーズなど、現代アメリカ小説の翻訳多数。『アメリカン・ナルシス』で第27回サントリー学芸賞受賞

ですが、とにかく日本文学が教えてくれたことは、言語を通して自分の個人的な体験を、単に飲みながらお互いに話すパーティー・ストーリーみたいなもの以上にしたい、それが小説を書くということなのです。

### 書き手のコントロールから離れ 物語に身をゆだねる瞬間

**柴田** 小説を書くというと、とても能動的な営みに思えますが、むしろ「能動的に受動する」という感じでしょうか。

**ダイベック** サレンダーというのは、非常に肯定的な意味で言っています。長年創作を教えてきましたし、自分も書くという技術を学んできたわけですが、最初はどうしても完全にコントロールしたいと思うんですね。

例えば、『ペット・ミルク』という作品を書き始めたときには、実際に出来上がったものとは全然違うエンディングを考えていました。円環的な終わり方がありますね。初めに戻ることがわかっているとすれば、それは一つの物語をコントロールしようとしていることとなります。ところが、完璧にコントロールしていると思って書いていたら、物語が全然違う方向に行ける可能

性が見えてくることがある。

陶器をつくる人が、どうなるかわからないけれど、とにかく土を違う形でこねてみるとか、それと同じように、違う方向に行ける可能性が見えてくるときに、そのままコントロールを続けるか、それとも偶然に任せるか。

最後までコントロールを続けてしまふとよいストーリーにならない。つまり、最後まで物語が自分を驚かせてい

ない。結局、物語が自分より賢いという瞬間がない物語になってしまう。どこかでコントロールが失われるところがないと物足りないのです。

どんな芸術でも、コントロールとサレンダーとの間にはダイナミックな関係があるだろうと思っています。ギターの演奏でも、絵画でも、あるいは武術、柔道とかでもよいのですが、最初のうちは技術をコントロールしようとする、あるいはマスターしようとする。そういう気持ちがあります。

うまくいけば、ページの上に書いてある言葉が命を帯び始めて、そうすると言葉が書き手に、僕に何を語ってほしいか、何を望んでいるかを伝え始めるようになる。十分、コントロールがうまくできるようになれば、逆にそこで少しコントロールを緩めることができて、物語を語るというよりも、物語を聞き始めるようになる。そして、しばらくすると、物語を聞くその度合いが、結局、その小説がうまく書けているかどうかの度合いになります。聞けるようになればなるほどよいのです。

\*2008年10月22日、ジュンク堂書店池袋店で開かれた「それ自身のインクで書かれた街」（白水社）刊行記念トークショーをもとに、編集部がまとめたものです。



ダイベック氏と柴田氏のトークショーの様子